

お父さんと最後にお風呂に入ったのはいつだったか。

私は幼少期の記憶はたしかな方だが、お父さんと最後にお風呂に入った時のことを思い出せない。ただ、お母さんやおばあちゃんと違って、私の髪を洗う時シャンプーが目に入らないようにとか、転んだすり傷に水がかかって痛くないようにとか、細かい気遣いをしてくれるお父さんが好きだったのは覚えていいる。お父さんのお風呂は、これで最後という意識も無いままいつのまにか終わっていた。

今週末は父の日らしい。駅の花屋にも電車の吊り広告にも、至るところで父の日の広告が目に入る。

「ほら、ここは間が広いから気をつけて。」

4歳くらいの女の子が、お父さんに手をひかれて電車からホームへ飛び移った。昼過ぎの、座席が足りなくも余りもしないくらいに程よい乗車率の車内には、たくさんのしゃべり声がそれなりの音量で飛び交っている。私は周りの人が何を話しているのか、なぜそんなに話すことがあるのか興味深く、話し声に意識を研ぎ澄ませた。それでも、そのひとつひとつが何を言っているのか判別がつかないから不思議だ。最近家にこもりがちだったが、今日は久しぶりの遠出をしている。どうしても六月のこの時期じゃないといけないから、大学の補講に出るのをあきらめて私たちは箱根に向かっている。連れの慎くんは、私の隣でずっと本を読んでいる。乗り換えの時だけは本のカバーの織り込まれている部分をしおり代わりに挟んで、電車に乗るとまた開く。

お父さんだったらなあ。こんな時いつも思う。

お父さんが生きてたら、お父さんと一緒に行ってたのかなあ。

小学生の時にお父さんとスケートリンクに行った記憶を手繰り寄せると、線路の音にのせて、心地よい重さの父の声の思い出される。

「じゃあ問題。次はどっちのドアが開くでしょうか。」

「えー、わかんないよ。さつき左だったから右かな」

「じゃあお父さんは左で」

わくわくしながら電車に揺られる。

「次はー虹ヶ丘ー左のドアが開きます」

私とお父さんは、にやりと顔を見合わせた。負けた！

「はい、お父さん1ポイントです」

そんなことをしているうちに、気付くとスケートリンクに着いた。

「大人と子供、一枚ずつください」

チケットを買って、スケート靴をかりる。道の途中に五十円でわたあめを作れる機械があつて、帰りにやろうねと約束した。私と同じ歳くらいの女の子たちがスイスイすべっている横で、スケートが初めてのお父さんが手すりにしがみつきながらへっぴり腰で歩いているのがおかしくて、笑ってしまう。かくいう私もそんな姿らしく、お父さんも笑っていた。

「…え、ねえ、次降りるよ！」

慎くんが不機嫌そうな顔でこっちを見ている。

「いつも寝るんだから。」

『寝てないし。目を閉じて考え事してただけだし。』

私も不機嫌な顔になってしまっているだろうか。ひざに乗せていたバッグを腕にかけて、いつでも立ち上がれるように準備しながら心の中で反論した。

『寝ないでほしいならずっと本読んでないで相手してよ』

とも言いたくなった。でも、もし私が相手を楽しませられる人だったら、慎くんも本を読み始めなかったんじゃないかと思つて、言わなかった。それに、私は自分と一緒にいる人に、楽しんでいてもらいたいんだつた。ゲームしていったって、イヤホンで音楽を聴いていたって、自分の趣味について語っていたってなんでもいいけど、自分という相手が無理をしているとき、私はそれを感じてしまうし、自分の不甲斐なさにつらくなってしまう。だから今日は慎くんと

来たんだった。

「お父さん大好きだったんだね。」

サチは悲しそうな眉毛で、でも口元は少し微笑みながら言った。

親友のサチにはたまにお父さんの話をする。

「私のパパも私が小さい時は優しくして仲良しだったよ。でも今は昔ほど仲良くないなあ。会話自体あまりしなくなっちゃった。いつからだろうね。」

そういうものなんだろうか。たしかにドラマや映画でも、若い女の子とお父さんの仲がいい例はあまり見ないけど。私のお父さんでもそうだったかな。私には、話をしてくれない冷たいお父さんの想像がつかない。

「ついたよ」

劇のセリフを棒読みにしたような慎くんの声でまた現実にもどる。これは怒らせてしまったかな。バスから降りてコンクリートの道を少し歩いたところに入り口がある。入場料を払って園内に入ると、急に目前に広がった。

『これが見たかった!』

夢中で絵を描いた後の水彩画のパレットのように、紫や青やピンク、それらの間のなんとも言えない色などの紫陽花が風に揺れている。晴れて青空だったらもっと色彩が際立つだろうけど、曇り空にもよく合うなと思った。

「紫陽花の花言葉っていっぱいあるんだけど、」

慎くんが紫陽花を見たままつぶやいた。

「良い意味も悪い意味もいっぱいあるんだけど、ここの紫陽花には『一家団欒』が似合うね。」

「うん。」

慎くんの横顔がちよっとだけ笑って、うれしくなった。

その夜、夢をみた。

家のキッチンで私が課題をしていると、お父さんが来た。

記憶の中のお父さんより少し痩せて、しわも増えている。もう六十歳近くらしいに見える。

「ねえ、私お父さんみたいな人になりたい。」

私が言うと、お父さんはびっくりした顔をして三秒くらい黙ってから、

「ちいさい頃みたいなこと言うんだな。」

と言って、こんどは目を細めて嬉しそうな顔になった。でも少し寂しそうだ。

「ラーメン食べに行くか。」

「うん。」

遠くから目覚ましの気配を感じはじめながら、もう少しの間、寝ていられますようにと願った。